



Title	第4章 エスニック・アイデンティティの諸相
Author(s)	新藤, こずえ
Citation	「調査と社会理論」研究報告書, 30, 51-67
Issue Date	2013-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52415
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00075302_30_4.pdf



第4章 エスニック・アイデンティティの諸相

新藤こずえ | 立正大学社会福祉学部講師

はじめに

本章ではアイヌの人々のエスニック・アイデンティティの諸相を考察する。具体的には、アイヌとしての自己意識の形成と変容について、過去から現在に至るまで、どのような経験がエスニック・アイデンティティに影響を与えてきたのかを描く。

エスニック・アイデンティティとは、ある民族集団が歴史的に形成してきた言語・習慣・行動規範・価値観・知識などの文化パターンを基礎とし、その集団内で共有されている態度や感覚といったものであり（Phinney 1990）、エスニシティの差異は、ときとして「生得的」なものと考えられているが、実際にはすべて学習されたものであるという（Giddens 2001=2004）。本章では、アイヌの人々のこれまでの人生におけるエスニック・アイデンティティにかかわる経験のなかでも、とりわけアイヌ文化の体験と運動への関わりに焦点をあて、それらがアイヌとしての現在の生活と将来展望にいかなる影響をもたらすのかについて検討する。

分析の視点としては、アイヌであることの自己意識について、「肯定的」「否定的」あるいは「どちらでもない」という3つの群に分け、それらの意識が過去・現在でどのように変容したかを検討する。その際、世代によってアイデンティティを意識する経験が異なることをふまえ、年齢層ごとに分析を行う。なお、本調査の対象は新ひだか町に在住するアイヌの人々であるが、同じく農山漁村部にあるむかわ町において同様の調査を行った小内・長田（2012）の分析結果を参照しながら、アイヌの人々のエスニック・アイデンティティを考察する。

第1節 エスニック・アイデンティティの形成と変容

第1項 現在と過去の意識の概要

まず、各人のインタビュー結果全体にもとづいて、現在アイヌであることに対する意識を以下の観点から、3つの群に分類した。①「肯定的である」は、「アイヌであると（堂々と）言える」「アイヌの伝統を継承したい」「アイヌの文化を広げたい」など、現在アイヌであることに肯定的な人々の意識である。②「否定的である」は、「アイヌであると知られたくない」「アイヌであることにコンプレックスをもっている」「ネガティブなイメージがある」など、アイヌであることを隠したいと考えており、アイヌであることに否定的な人々がもっている意識である。③「どちらでもない」は、「アイヌであるとともに意識しない」「民族のことは気にしない」と考えている人々の意識になる。なお、アイヌの養子となった和人や配偶者がアイヌである和人の場合もアイヌの人々と同様の観点から分析した。

全体の結果としては、新ひだかでは、「肯定的である」と「どちらでもない」が同じ割合であり

(49.1%)、「否定的である」者はほとんどいない(1.8%)ということがわかる。むかわ調査では、「肯定的である」者が40.2%、「どちらでもない」者が53.6%、「否定的である」者が6.3%であったことと比べると、新ひだかではアイヌであることに対して肯定的な意識をもつ者が多い(表4-1)。

表4-1 アイヌであることに対する現在の意識 単位：人、%

	肯定的である		否定的である		どちらでもない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
新ひだか	28	49.1%	1	1.8%	28	49.1%	57	100.0%
むかわ	45	40.2%	7	6.3%	60	53.6%	112	100.0%

年齢層別にみると、「肯定的である」者は、老年層(63.6%)、壮年層(42.3%)、青年層(32.3%)の順に多く(表4-2)、これは、むかわ調査において「肯定的である」者が老年層(58.5%)、壮年層(35.7%)、青年層(20.7%)の順に多かったことと同様の結果となっている。ただし、いずれの年齢層も「肯定的である」者の割合が、むかわより新ひだかで多くなっている。また、「どちらでもない」者は、青年層において66.7%(むかわ69.0%)、壮年層において53.8%(むかわ59.5%)、老年層において36.4%(むかわ59.5%)を占めている。

表4-2 アイヌであることに対する現在の意識 単位：人、%

	肯定的である		否定的である		どちらでもない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
青年層	3	33.3%	0	0.0%	6	66.7%	9	100.0%
壮年層	11	42.3%	1	3.8%	14	53.8%	26	100.0%
老年層	14	63.6%	0	0.0%	8	36.4%	22	100.0%
合計	28	49.1%	1	1.8%	28	49.1%	57	100.0%

次に、新ひだか調査におけるアイヌであることに対する過去と現在の意識は、表4-3のとおりである。全年齢層を合わせた結果としては、現在において「肯定的」である28人のうち、過去からそうであった者はわずか7人であり、9人は「否定的」、12人は「どちらでもない」という者であった。

過去において「否定的」であったが、現在は「肯定的」に変化している者は、壮年層で2人、老年層で7人であった。「どちらでもない」に変化している者は、青年層で2人、壮年層で5人、老年層で3人であった。一方、過去において「肯定的」であった者が「否定的」に変化した例はなかった。

過去においても現在においても「否定的」である1人を除き、全体的には過去に比べてアイヌであることを「否定的」と捉える者は少なくなっており、「どちらでもない」か「肯定的」な方向に変化している。老年層については「肯定的」な方向への変化が明らかである。壮年層は「否定的」から「どちらでもない」への変化がみられる。

このように、過去から現在におけるアイヌであることに対する意識の変化には、世代による違いがみられる。次項では、年齢層ごとに、いかにしてこのような意識の変容が起こったのか、あるいは変容しなかったのかを検討する。

表4-3 アイヌであることに対する過去と現在の意識

単位：人、%

	現 在								
	肯定的である			否定的である			どちらでもない		
青年層 (9人)	肯定的	3 100.0%	3	肯定的	0	0	肯定的	0	6
	否定的	0		否定的	0		否定的	2 33.3%	
	どちらでもない	0		どちらでもない	0		どちらでもない	4 66.7%	
壮年層 (26人)	肯定的	1 9.1%	11	肯定的	0	1	肯定的	0	14
	否定的	2 18.2%		否定的	1 100.0%		否定的	5 35.7%	
	どちらでもない	8 72.7%		どちらでもない	0		どちらでもない	9 64.3%	
老年層 (22人)	肯定的	3 21.4%	14	肯定的	0	0	肯定的	0	8
	否定的	7 50.0%		否定的	0		否定的	3 37.5%	
	どちらでもない	4 28.6%		どちらでもない	0		どちらでもない	5 62.5%	
合計 (57人)	肯定的	7 25.0%	28	肯定的	0	1	肯定的	0	28
	否定的	9 32.1%		否定的	1 100.0%		否定的	10 35.7%	
	どちらでもない	12 42.9%		どちらでもない	0		どちらでもない	18 64.3%	

第2項 アイヌとしての意識の形成過程と変容

(1) 老年層

老年層においては、現在、アイヌであることに否定的な意識を有している者はおらず、過去において「否定的」であった10人は、現在、7人が「肯定的」、3人が「どちらでもない」に変化している。また、過去から現在にいたるまで変化のなかった者は、「肯定的」が3人、「どちらでもない」が5人である。

現在、「肯定的」な意識を有している14人のうち、過去においても「肯定的」であった者は3人、「否定的」であった者は7人、「どちらでもない」者は4人であった。これらの人々の意識の形成過程に影響を与えたと考えられる語りに注目してみよう。

(過去も現在も「肯定的」である者)

- ・ お父さんの父親、〇〇（地区名）の酋長で、その祖父も〇〇の酋長だったんです。（老年層・女性）
- ・ 今は、あたしはアイヌって、血統書付きのアイヌだって言ってます。ほかの、うちのお父さんたちみたいに半々じゃないから、両親ともあれ（アイヌ）だから、胸張ってますけれども。（老年層・女性）
- ・ 僕からいうと祖父ね、△△の部落で一応、酋長的な方だったんですね。（老年層・男性）
- ・ 小学生のころ、5年からそのイナウを見て、あ、これはアイヌの血筋なのかなっていう記憶を、そして来る人たちの話聞いたり（中略）そういう先祖供養みたいなことのものまねっっちゃうのかな、をやっているのを見て、あ、これはアイヌの行事の一つなのかなっていうふうに自然にそれを受け入れたって感じね。（老年層・男性）

(過去は「どちらでもない」が現在は「肯定的」である者)

- ・ 静内に来て、シャクシャイン、あんた暇だったら手伝ってくれないかって言われて、いいよって。(中略)「えー、こんな儀式があるんだ」っていうことに目覚めたし、先祖供養って、「あー、すごい立派なことやってるんだな」と思ったのと、そういうあれ(儀式)に参加できる自分が何か嬉しいなという気がして。だから積極的に出るようになった。(老年層・女性)
- ・ 自覚したのは、保存会活動するようになってからかな(中略)踊りとか儀式とか。(老年層・男性)
- ・ もともと趣味でずっと縫い物はやってたんで、和裁も、私、学校で習ってるんで、ある程度は自分が縫えるのと、あと、その縫い方違ったりはするんですよ。アイヌの縫い方と普通の一般の縫い方と違ったりするんですけど、今は結構縫いやすいように今の縫い方が取り入れられてるところとかもあったりするんで。(老年層・女性)

(過去は「否定的」であったが現在は「肯定的」である者)

- ・ 隠したくてもね。天に向かって何で俺は生まれたって、いっつも、そうもう天に向かって言ってたもんだよ。うん。なんでアイヌに生(う)まらしたんだって…(中略)(しかし、アイヌの伝統工芸作品製作に取り組み)賞もらったことあるんだよね。(老年層・男性)
- ・ 何だかんだと言ったって、アイヌの血を引いてるから。シャモにはなれないですね。(老年層・男性)
- ・ 私も東京や神奈川、あっちのほうへ行ったら、アイヌなんて言われたこともないし、だから千葉に。たまたま、「あんた、沖縄じゃないかな」と。裸になったら、沖縄の人より毛ないし。(老年層・男性)

このように、過去も現在も「肯定的」である者は、自らの先祖の存在にふれ、アイヌとしての血筋の確かさや、正統な伝統文化を受け継いでいるという自負がみられる。また、過去は「どちらでもない」が現在は「肯定的」である者は、シャクシャイン祭りへの参加や保存会活動、アイヌの伝統的な裁縫などの文化活動へのコミットが、アイヌとしての自分を肯定的に捉えられるようになる契機となっていた。過去は「否定的」であったが現在は「肯定的」である者は、過去に差別をされた体験とともに、アイヌの血筋であることにネガティブな意識を有している時期があったことにふれ、その後、アイヌであることを活かして取り組んだ伝統工芸作品づくりを通して「賞もらった」ことが誇りになっている。また、このようなポジティブな体験ではなくても、「シャモにはなれない」という諦観という意味合いでのアイヌとしての自己肯定、あるいは都市部での「沖縄の人より毛ない」という他の身体的特徴をもった人々との比較を通じ、自分はまだ「まし」だと思えることがアイヌとしての自分を肯定的に捉えることにつながっていた。

一方、現在において「どちらでもない」8人は、過去において「否定的」が3人、「どちらでもない」が5人だった。

(過去も現在も「どちらでもない」者)

- ・ 山から下りてきて、ちょっと歩いてたら、やっぱり同じくらいの年の子が、やっぱり言うからね。ああ、あれはアイヌだって。最初は何言ってるのかなあって思ったけど、だんだん年

行くにつれ気付いただけで、誰からも教えてもらった訳でもないし、どこに働いても差別はなかったよ。(老年層・女性)

- ・ 25, 6歳になるまで自分にアイヌの血が流れていることを知らなかったし、家庭ではまったくアイヌとしての生活をしたことはない。(老年層・男性)

(過去は「否定的」であったが現在は「どちらでもない」者)

- ・ 過去のことはまったく知らないし、知りたくもない。アイヌの言葉、伝統行事のことはまったく知らないし、過去のトラウマがあり覚えないとも思わない。(老年層・男性)

過去も現在も「どちらでもない」者は、自身がアイヌであるということを認識する機会が少ないため、アイヌという理由で差別された経験がほとんどないか、差別的な見方をされた経験があったとしても、感情面での葛藤があまりなく、アイヌであるということでの実際的な不利益を被っていなかった。

また、過去は「否定的」であったが現在は「どちらでもない」者の語りには、過去に、アイヌであることで差別された経験や、自身がアイヌであることをネガティブな意味合いで捉えていた時期があったことを示唆していた。しかし、現在は、アイヌであることにふれないという対応をすることによって、否定的な感情を消し去ろうとしている意識や、否定的な感情は消えつつあるものの、アイヌ文化を次世代に伝えようとする意識は希薄であることがみてとれる。

(2) 壮年層

壮年層においては、現在、アイヌであることに「肯定的」である11人のうち、過去においても「肯定的」であったものはわずか1人であり、「どちらでもない」が8人、「否定的」が2人だった。

(過去も現在も「肯定的」である者)

- ・ 父親がアイヌのカムイノミの伝承者で…。(壮年層・男性)

(過去は「どちらでもない」が現在は「肯定的」である者)

- ・ 最初はアイヌ民族の1人として意識することはなかったけれど、アイヌ協会の仕事を手伝ったり、アイヌ民族の踊りを見たりする時にだんだんと意識するようになった。(壮年層・女性)
- ・ 極力、協会に入ってからはいろんな行事とか参加するものは参加して。(壮年層・女性)
- ・ シャクシャイン像見て感動。自分もこうなれたら良いなあっていうの。(壮年層・女性)
- ・ 向き合えるようになったのは、年齢だし、結婚して、子ども生んでから、だからもう30過ぎてから、うん。夫婦でアイヌだし、やっぱり自分たちが何気にこう、いい思い出がなかったんだけど、やっぱりそれをわかってアイヌ同士で結婚して、子どももうけたっていうことは、この子をどうやって育てるか、アイヌとして恥じない、恥じないんだっていうふうにならなければ、子どもも育ちやすいんじゃないかと思って。(壮年層・女性)
- ・ 受け入れたっていうことでしょうね。開き直ったといってもいいかもしれないし。受け入れたんだね。(壮年層・女性)

- ・ 私は一生懸命悩んだんだけどね。それでそうやって、アイヌとアイヌの子だから、アイヌとして育てるべきだって。(壮年層・女性)
- ・ やっぱりお客様ってアイヌの人を見たくてくるっていうか、会いたくてくるっていうか、そういう方も中にはいらっしゃるの、「アイヌですよ」という部分は多いんですよ。だから、うーん、やっぱりアイヌなのかなって思いますけど。(壮年層・女性)
- ・ いまは自分は(アイヌであることを)当たり前だと思ってんで、意識していないのかもしれませんが、ときどき「あ、やっぱり」ということはやっぱり考え方だとか、もちろん外見はもちろんですよ。(壮年層・男性)

(過去は「否定的」であったが現在は「肯定的」である者)

- ・ 年寄りの人たちと対等っていったらおかしいけど、言ってることがわかるくらいにはなりたいてよ。でも、ほとんど半分以上わかりませんからね。(アイヌ語を)しゃべられたらね。(壮年層・男性)
- ・ 話掛けてくる人はアイヌの事についてこれはどういうふうにとかっていうふうに分かれたときに、自分の中で知ってなきゃいけないことがあるんだなっていうのがわかりましたね。(壮年層・女性)

過去も現在も「肯定的」である者は、父親がアイヌのカムイノミの伝承者であり、アイヌ文化の継承に誇りを感じることができる環境で生活してきたとみられる。

過去は「どちらでもない」が現在は「肯定的」である者は、アイヌ協会での行事や文化活動に参加するなかで、アイヌであることを肯定的に捉えることができる機会をえている。また、アイヌであることを「受け入れ」、あるいは「開き直」ることや、「当たり前」と思うこと、子どもを「アイヌとして育てる」というスタンスを決めたことが、肯定的な意識となる契機になっていた。

過去は「否定的」であったが現在は「肯定的」である者は、過去にアイヌであることによるネガティブな経験を有していながらも、現在、アイヌである自分が、アイヌ語を話せないことや、アイヌ文化について他者に尋ねられたときに説明する知識をもっていないことにもどかしさを感じ、アイヌの言葉や文化を学ぶ意欲が生じたことが、肯定的な意識を有することにつながっている。

一方、現在においてアイヌであることについての意識が「どちらでもない」14人のうち、過去においてもそうであった者は9人であり、「否定的」であった者が5人であった。また、現在においても過去においても否定的な意識を有しているものは1人であった。

(過去は「否定的」であったが現在は「どちらでもない」者)

- ・ 小さいときは毛深いのは気にしましたよ。あと、子どもが毛深いのは嫌だなんていうのはちょっとありますけど。自分の血はあまり引いて欲しくないなと。とりあえずうちの時代よりは、教育がある程度しっかりしてきているから、そういう偏見というのは減りましたよね。(壮年層・男性)
- ・ 意識するといったら、自分が生まれてきて、今度自分の子どもを産むと、その自分の子どもが見た目的に毛深いかどうかとかって気になるんですよ、すごく。私のせいでこの子たち

が毛深いんじゃないかとかと思って…（中略）顔に特徴があって、目鼻だちがはっきりしてて、いいと思うところはあるんですよ。（壮年層・女性）

- ・（シャクシャイン祭りなどの行事を）自分がこうやって一緒にやっているというのが自分もアイヌっていうことだから。（壮年層・女性）

（過去も現在も「どちらでもない」者）

- ・ アイヌ民族のひとりであると自覚したことはないし、自覚するようきっかけもなかった。アイヌ協会に入っているが、自分自身がアイヌ民族のひとりであると考えたことはない。普段心がけているアイヌ文化や関わってみたいと考えているアイヌ文化はない。（壮年層・女性）
- ・ 普段から考えたことはないですけど、そういう話が出たりすると間違いなく血筋はもってるっていうのはある。（壮年層・女性）

（過去も現在も「否定的」である者）

- ・ 小さい時からそういうもんだって思ってるから、わかってるんだけど周りにわからないようにしてるっていうのかな、それが現状です。（壮年層・女性）

過去は「否定的」であったが現在は「どちらでもない」者は、男性も女性も毛深いという身体的特徴について否定的な感情をもっており、そのことによって過去に自分が経験した苦労を自分の子どもにさせたくない心配しているが、現在は、偏見や差別についての「教育がある程度しっかりしてきている」ことや、むしろアイヌとしての身体的特徴について「目鼻立ちがはっきりしてて、いいと思うところはある」という肯定的な意識が芽生えていることが、過去の否定的な意識を相殺している。

過去も現在も「どちらでもない」者は、アイヌ民族であると自覚するきっかけがなかった者と、血筋はもっているということは認識しているものの、そのことについて特別な意識は有していない者が含まれている。

一方、過去も現在も「否定的」である者は、子ども時代から、アイヌであるということを「周りにわからないように」することが当たり前の環境のなかで育ち、現在もアイヌであることを極力隠しているという状況であった。

（3）青年層

青年層においては、現在、アイヌであることに「肯定的」である3人は過去から「肯定的」な意識を有していた。一方、現在、「どちらでもない」意識をもつ6人のうち2人は、過去においては「否定的」な意識を有していた。

（過去も現在も「肯定的」である者）

- ・ ちゃんと大人の考えになる高校出てからとか、社会人になってからいろいろ。伝統的なこと見たり聞いたりして。いろいろ歴史を知るとやっぱり…。もうこの文化は絶やさない方がいいなって思いますね。（青年層・男性）

- ・ なんだかんだ嫌々でもアイヌ語弁論大会に出されてアイヌ語も教えて貰って。その時に、弁論の内容を書くのにちっちゃい時の思い出とか、それこそ聞かれたんですけど、その時に初めてあれもアイヌ文化だったんだとか、再認識する部分があったりとかで。(青年層・男性)
- ・ アイヌ文化でそれこそ理想としたのは、ばあさんの兄さんみたいに将来になりたいなとは思いましたね。木彫りしながらシャケ食って酒飲んでみたい。(青年層・男性)
- ・ 小さいころから保存会入ってて、踊ることが当たり前で、儀式に参加することが当たり前になってしまってたので。(青年層・女性)

(過去は「否定的」であったが現在は「どちらでもない」者)

- ・ 自分が意識なくても周りに意識されるんで、劣等感ありますよね。(青年層・女性)
- ・ アイヌとして知られずに生活しながらも、アイヌ文化引き継いで活動していきたい。アイヌとして積極的に生きていきたい、なんていうのはないけども。(青年層・女性)

(過去も現在も「どちらでもない」者)

- ・ 通常生活ではあまり意識はしてこなかったんですけど、一応そうなんだよということで(母親に)教育されてというか。(青年層・男性)
- ・ アイヌとして積極的に生きていきたいという訳ではないし、別に普通に？(アイヌ民族に)見られればそれで良いし、別に自分で意識してる事だから、積極的になって訳じゃないけど。(中略)別に普通に、自分見られても良いっていうか、自分でも意識してるから、別にそのまま、今もこれからも、普通に。(青年層・女性)

過去も現在も「肯定的」である者は、アイヌ文化にふれる機会や、肯定的な意味合いでアイヌについて学ぶ機会を豊富に有していただけでなく、自らがアイヌ語や木彫り、踊りなどを他者に披露するという経験を有しており、アイヌであることに積極性を見出していた。

一方、過去は「否定的」であったが現在は「どちらでもない」者は、過去においても現在においても、アイヌであることについて「劣等感」があることに変わりはないが、アイヌ文化の楽しさや重要性を認識しており、「アイヌとして知られずに生活しながらも、アイヌ文化引き継いで活動していきたい」というアンビバレントな感情をもっていた。

過去も現在も「どちらでもない」者は自らがアイヌであることを認識していながらも、そのことについて「とくに意識してこなかった」し、これからはアイヌであることについて積極的でもなく消極的でもなく「普通に」生活していきたいということであった。

(4) まとめ

アイヌであることに対しての意識は、家族や家族以外のアイヌの人々との交流と、そこでの経験で付与される、「アイヌ性」ともいうべきものへの捉え方によって異なっている。アイヌであることについての「肯定的」な意識は、どの年齢層であっても、アイヌ文化を通してえられる楽しさや、活発にアイヌ文化を行っている周囲の人間関係からもたらされる自己肯定感によって醸成されている。一方で「否定的」な意識をもつにいたる背景には、直接的に自らが差別的対応を受けて嫌

な思いをした経験のほか、家族をはじめとする周囲の人々の、「アイヌであることは隠すべきことである」といった感情を幼少期から抱かせられるといった経験がある。これは、老年層や壮年層に顕著であった。このような傾向は、むかわ調査でもみられた（小内・長田 2012）。

一方で、アイヌであることについて、現在、肯定的でも否定的でもない意識である人々には、過去に否定的な意識であったが、現在は、アイヌ文化等にふれたり、差別的対応をされる経験が減少したりするなかで、否定的な意識が薄らいできている場合が多い。しかし、とくに青年層において、そもそもアイヌであることを意識する機会がないことによって、どのような意識ももてないとするならば、それは、民族としてのアイデンティティが世代を追うごとに失われつつあることを示唆している。しかしながら、このことは一方で、アイヌとしての肯定的な意識をもつにいたるための経験をする余地がまだ残されているともいえるのではないだろうか。

第2節 アイヌ文化の体験と影響

第1項 アイヌ文化の体験

前節でみたとおり、アイヌ文化の体験が、アイヌであることのエスニック・アイデンティティに影響をもたらしている。ここでは、具体的にどのような文化体験がエスニック・アイデンティティに影響をおよぼしているのかを検討する。

まず、実践しているアイヌ文化の有無について、現在、実践している文化がある者は新ひだかで47.4%、むかわで66.1%であり、新ひだかではむかわよりも文化を実践している者が少なかった（表4-4）。

表4-4 アイヌ文化の実践 単位：人、%

	実践している文化				今後実践したい文化			
	あり		なし		あり		なし	
新ひだか	27	47.4%	30	52.6%	38	66.7%	19	33.3%
むかわ	74	66.1%	38	33.9%	97	86.6%	15	13.4%

しかし、年齢層別にみると、新ひだかでは、青年層において文化を実践している者の割合が66.7%であり、むかわの48.3%よりも多かった。新ひだかでは、文化を実践している者の割合は、青年層（66.7%）、老年層（59.1%）、壮年層（30.8%）の順で多かったが（表4-5）、むかわでは、老年層（75.6%）、壮年層（69.0%）、青年層（48.3%）の順であった。

表4-5 アイヌ文化の実践 単位：人、%

	実践している文化				今後実践したい文化			
	あり		なし		あり		なし	
青年層	6	66.7%	3	33.3%	7	77.8%	2	22.2%
壮年層	8	30.8%	18	69.2%	17	65.4%	9	34.6%
老年層	13	59.1%	9	40.9%	14	63.6%	8	36.4%
合計	27	47.4%	30	52.6%	38	66.7%	19	33.3%

実践しているアイヌ文化の内容をみると、女性では、保存会での踊りや歌、縫い物や料理が多く、男性ではカムイノミ、イナウ、木彫りなどであった。以下では、アイヌ文化の実践の内容を、家庭での日常生活に組み込まれて実践されているアイヌ文化、シャクシャイン祭りなどアイヌ協会の行事や保存会への活動への参加を通して行われる文化体験の2つの視点から、その内容と関わりについてみていく。

(1) 日常生活に組み込まれたアイヌ文化

子どものころのアイヌ文化については、老年層でアイヌ語を日常会話として使用する家族や入れ墨、囲炉裏を中心とした生活、伝統的な家屋（チセ）に住むこと、イナウを捧げる、カムイノミ、トゥスクルにみてもらうなどの経験をしている者が多かったが、壮年層では、アイヌ語、入れ墨について見聞きしたことがある者がいるものの、チセでの生活や囲炉裏のある住宅での経験者はいなかった。青年層では、祖母がアイヌ語を話しているのを聞いたことがある1人を除き、日常生活においてこれらの伝統文化を経験した者はいなかった。

老年層と壮年層を中心に、日常生活の中で経験したアイヌ文化についてみると、アイヌ語や入れ墨について見聞きしたという者が多い。「兄弟同士、学校では子ども同士では日本語を話していたが、大人同士ではアイヌ語を話していた」(老年層・男性)、「母の姉や父の姉妹は入れ墨を入れていた。祖母も入れ墨をしていた」(老年層・男性) というように、家族や親戚など身近な人々がアイヌ語を話したり入れ墨をしたりしていた。しかしながら、「もう…婆ちゃんが入れ墨入ってた人だけど、おまえらはアイヌ語を覚える必要ないって言って」(老年層・男性)、「叔母はいつもハンカチで入れ墨を隠していた。若い人に入れ墨をじろじろ見られとても傷ついていた」(老年層・男性)、「子ども心にそれ（アイヌ語）を聞くのがとても嫌だった。まわりはそれを聞いていていじめの種にする」(老年層・男性)、「子ども同士でアイヌ語を話すときと生意気だと大人に怒られた。話したいとは思わなかった」(老年層・男性) というように、アイヌ語や入れ墨に対して否定的な意味づけがなされていた。

その他のアイヌ文化には、「生まれた家は茅葺の家だった」(老年層・男性)、「女の人が亡くなったら、チセ作って…（燃やした）」(老年層・女性)、「日常茶飯事カムイノミ」(壮年層・女性)、「母のお婆ちゃんが、祈祷師みたいな人だったんです」(壮年層・女性)、「風邪を引いたり何かしたら、神の力を借りて、ハレオガミってね、それはよくアイヌの人が風邪を引いたら子どもの調子が悪いときは、アペカムイってね」(老年層・男性) のようにさまざまなものがあり、アイヌ語や入れ墨に比べると否定的な捉え方はなされておらず、現在においても形を変えて、継承されているものがある。

「月1のカムイノミっていうのがあって、月1回それこそ必ず1番大きいチセに集まって、みんなでお祈りするっていうのがあって、それがもう習慣になってますけどね」(青年層・男性)、「自分で作ったんですよ。ちっちゃい囲炉裏。持ち運びできる、ポータブル囲炉裏を」(青年層・男性) などのように、青年層は、子どもの頃に日常生活の中でアイヌ文化を経験していないにもかかわらず、子ども期以降に学ぶ機会をえることにより現在の生活の中にアイヌ文化を取り入れている。その契機となっていたのが、アイヌ協会の行事や保存会への活動参加である。

(2) アイヌ協会の行事への参加や保存会での活動体験としての文化

現在、アイヌ文化を実践している人々の多くが関わっているのが、アイヌ協会の行事への参加や保存会での活動である。

壮年層は、青年層や老年層に比べ、アイヌ文化を実践している者の割合は低くなっている(30.8%)。理由としては、仕事や子育てのために、継続的なアイヌ文化活動への参加が困難であることが考えられるが、そのなかにおいて参加できるものが、アイヌ協会の行事である。「今は、ただアイヌ協会に入ってお手伝いしながら、ああ、そういえばこういう風にやった、いやあ、昔こんなやり方でなかったよなとか、そのくらいはわかりますけど」(壮年層・男性)、「協会に入ってますから、いろんな今のシャクシャインの儀式にも出てますし、イチャルパやりますし。でも、個人ではイナウも何もありませんから」(壮年層・男性) というように、個人の日常生活ではアイヌ文化を実践していないものの、アイヌ協会が実施する行事は、人々をアイヌ文化につなぎとめる役割を担っているとみられる。また、つなぎとめるだけでなく、「協会っていうの知って、年に1回のシャクシャイン祭りのお手伝いから参加させてもらってくうちに、そのアイヌとしての自覚、誇りまではまだないですけどね」(壮年層・女性) というように、アイヌとしての「自覚」や「誇り」を意識するような機会にもなっている。

青年層や老年層においても、「同年代が(アイヌの伝統的な踊りを)踊ってるのを見たらちよっとやってみようかなって。そこで初めて踊りを見せて貰った感じですかね」(青年層・男性)、「何か踊っているの見たら、やっぱり血が入っているせいか、自分もやってみたいっていう気持ちになった」(老年層・女性) というように、行事をきっかけに踊りの保存会に誘われ、全国各地での伝統文化普及啓発のためのイベントで踊りをはじめた者もいる。老年層の女性は、その活動が認められて、賞を受けることとなり、アイヌの踊りを披露することは「楽しいことばかり」と語っている。

しかし、小学生のときに、踊りを同級生に見られ、「アイヌ、アイヌってばかにされた」(青年層・女性) というネガティブな経験をした者や、踊りに興味があるものの「息子とか弟とかに踊りのあれ(保存会)に入ると言ったら、やめてくれと言われたんで入れないんですけど」(青年層・女性) というように、文化活動へのコミットを希望しながらも、周囲の反対にあって実現できていない者もみられる。

このように、アイヌ協会の行事は、これまでアイヌ文化にかかわってこなかったアイヌの人々が、主体的に文化活動を行うきっかけを提供しているといえるだろう。だが一方で、そのようなきっかけを活かして、継続的に活動をしたいという、積極的な意味でのエスニック・アイデンティティの芽生えを阻害する要因が、アイヌ以外の人々やアイヌの人々自身、その家族にも残されている。

第2項 アイヌとしての今後の生活への意識

前項では、これまでのアイヌ文化の体験についてみてきたが、ここでは、アイヌとしての今後の生活の意識を、今後実践したいアイヌ文化とのかかわりからみていく。

本調査では、アイヌとしての今後の生活の意識について、「アイヌとして積極的に生きていきたい」「極力アイヌであることを知られずに生活したい」「とくに民族は意識せず生活したい」の3つの選択肢からもっとも近いものについて回答を得たが、いずれにもあてはまらないという者もいたため、これに「その他」の意識も加えた。

その結果、全体としては、「とくに民族は意識せず生活したい」が50.9%でもっとも多く、次いで「アイヌとして積極的に生きていきたい」が36.8%、「極力アイヌであることを知られずに生活したい」が1.8%であった。いずれにもあてはまらない「その他」も10.5%あった。表4－6では、「アイヌとして積極的に生きていきたい」を「積極的」、極力アイヌであることを知られずに生活したいを「消極的」、「とくに民族は意識せず生活したい」を「どちらでもない」として表記した。むかわ調査に比べ、「積極的」である者は少なく、「どちらでもない」者が多くなっている。この結果を、現在の意識との対比でまとめたものが表4－7である。

表4－6 アイヌであることに対する今後の意識

単位：人、%

	積極的		消極的		どちらでもない		その他		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
新ひだか	21	36.8%	1	1.8%	29	50.9%	6	10.5%	57	100.0%
むかわ	67	59.8%	4	3.6%	41	36.6%	—	—	112	100.0%

注) むかわ調査における「肯定的になる」は「積極的」、「否定的になる」は「消極的」と表記

表4－7 アイヌであることに対する今後の意識

単位：人

	現在		今後		現在	今後		現在	今後		
青年層 (9人)	肯定的	3	積極的	2	0	積極的	0	どちらでもない	6	積極的	2
			消極的	0		消極的	0			消極的	0
			どちらでもない	0		どちらでもない	0			どちらでもない	3
			その他	1		その他	0			その他	1
壮年層 (26人)		11	積極的	6	1	積極的	0		14	積極的	0
			消極的	0		消極的	0			消極的	0
			どちらでもない	4		どちらでもない	1			どちらでもない	12
			その他	1		その他	0			その他	2
老年層 (22人)		14	積極的	11	0	積極的	0		8	積極的	0
			消極的	1		消極的	0			消極的	0
			どちらでもない	1		どちらでもない	1			どちらでもない	8
			その他	1		その他	0			その他	0
合計 (57人)	28	積極的	19	1	積極的	0	28	積極的	2		
		消極的	1		消極的	0		消極的	0		
		どちらでもない	5		どちらでもない	1		どちらでもない	23		
		その他	3		その他	0		その他	3		

現在、アイヌであることに肯定的な意識をもっている28人のうち、今後も積極的に生きていきたいという者は19人（67.8%）である。むかわでは、どの世代においても、「肯定的」である人々は、例外なく将来にわたって「肯定的」であり続けることが明らかになっているが、本調査では、現在、肯定的な意識をもっている者がすべて、今後、積極的に生きていきたいというわけではなかった。しかし、表4－5の今後実践したい文化をみると、66.7%が実践したい文化があるとしており、壮年層、老年層に比べ青年層ではその割合が高くなっている。また、現在、実践している文化がある壮年層は30.8%にとどまっているものの、今後実践したい文化があると答えた壮年層は65.4%に達している。これは、壮年層は仕事や子育てのために多忙な世代であることから、現在はアイヌ文化活動には携わることが困難であるものの、いずれは、自分たちが継承していかなければならないという意思のあらわれなのではないだろうか。

今後実践したい文化の具体的なものとしては、アイヌ語、踊り、刺繍、料理、カムイノミ、イナウ、着物作り、アイヌの伝統的な儀式（婚礼、葬儀など）、ムックリなど多様であった。また、子ども世代に踊りや刺繍を習わせたいという希望も語られていた。この中には、「アイヌ語をきちんとしゃ

べってみたいね。勉強したいなって思ってる。アイヌだけどアイヌ語をろくにしゃべれないからね。それは、自分が情けないと思うよ」(壮年層・男性) というように自身がアイヌ文化としての言語を身につけたいというのや、「伝統的なことだからやっぱりカムイノミとかさ、そんなもの。そういうことをやっぱり僕もできれば覚えたいし。ということは、イナウを捧げるこういう行事も伴ってくるし」(老年層・男性)、「まだ若い子がいるんで、その若い子たちも何か一生懸命やってるっていうのがあるんで、できるだけ参加して、そういうのは役に立てるようにはしたいなとは思ってますね」(壮年層・女性) といった、次世代に継承するものとしてのアイヌ文化を盛り立てて行きたいという思いが読み取れる。

一方、「自分の見て来たアイヌ文化はあるが、それを今の人に伝えようと思ってもできない」(老年層・男性)、「今からこういうの(アイヌの伝統文化) やっても、まあ残すのはいいと思うけども、大変だと思うよ。ほとんどわからないんだから。今の若い人ね」(老年層・男性) という老年層の悲観的な見方があった。だが、青年層では「アイヌ同士が、アイヌ自身もやっぱり外に向けて発信するっていう意識をもっともっていかなくちゃだめなのかなっていうのは思いますね」(青年層・男性) といった前向きな将来展望も語られていた。

しかしながら、今後実践したいアイヌ文化の多さに比べると、今後アイヌとして積極的に生きていきたいという者の割合は低くなっている。ここには、アイヌ文化を大切にしながらも、アイヌであることをことさら強調することなく、自然に生きていきたいという意識がかいまみられる。

- ・ 今までもとくに意識してこなかったのが、積極的と言われるとあれなんですけど、そうだとすることは理解しながら、これから通常のとおりに。意識せずでもないし、積極的でもないし、中間ぐらいですね。(青年層・男性)
- ・ 別に「私アイヌですよ」と積極的に別に生きることもないと思うし。隠すこともしたくないし。何なんだろうな。でも別にアイヌとしての活動はしていきたいなっていう。(青年層・女性)
- ・ アイヌであろうが、朝鮮人であろうが、黒人であろうが、ひとりの人間としてどこの社会においても認められる世界に共通する人間の生き方があると思う。アイヌ文化はちゃんとあるけれど、アイヌ民族だからということではなく、そういう方向に憧れ希望を持っている。(老年層・男性)
- ・ 恥じることもないし、隠すこともないので。アイヌとして生きていく。アイヌとしてっていうか、普通に。(青年層・男性)

このように、アイヌ文化を実践することと、アイヌとして積極的に生きていくことは関連しているものの、同じではない。それは、アイヌという意識を取り戻す実践がアイヌ文化の活動であるのかもしれない、アイヌ文化へコミットする機会を増加させることが、アイヌとして積極的に生きていきたいという人を増やすことにつながるのかもしれない。

また、とくに意識せずに生きていきたいというケースは、老年層であれば、アイヌであるからこそ経験せざるをえなかった差別的な経験を背景にして、そういった差別が表面的には薄らいでいる現在においてはアイヌであることを意識しなくても生きていくことが可能であるという側面と、アイヌであることを、そもそも意識していない、あるいは、意識しなくてもアイヌであることを自然

と受け入れているという側面があるのかもしれない。

これまでの結果をふまえ、過去、現在、今後（将来）の時間軸に沿って分類したものが表4－8であるが、過去に比べ、現在はアイヌであることを肯定的／積極的に捉える人々の割合が増加している一方で、現在から今後の意識については、アイヌであることを「意識しない」という層が多くなっている。エスニック・アイデンティティの視点からは、アイヌであることに対して、「どちらでもない」あるいは「意識しない」という人々の、背景をより詳しく探ることが今後の課題となるだろう。

表4－8 アイヌであることに対する過去・現在・今後の意識 単位：人、%

	肯定的／積極的		否定的／消極的		どちらでもない／意識しない		その他		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
過去	7	12.3%	33	57.9%	17	29.8%	—	—	57	100.0%
現在	28	49.1%	1	1.8%	28	49.1%	—	—	57	100.0%
今後	21	36.8%	1	1.8%	29	50.9%	6	10.5%	57	100.0%
合計	56	32.7%	35	20.5%	74	43.3%	6	3.5%	171	100.0%

第3節 運動への関わり方——アイヌ協会への加入と関わりの現状

これまでみてきたように、過去に比較して現在はアイヌであることに対するエスニック・アイデンティティは肯定的に捉える者が多くなっている。しかし、現在肯定的な意識を有していたとしても、それが今後、アイヌとして積極的に生きていきたいという意識と直接つながっているわけではないことも示唆された。こういった意識は、アイヌ民族としての社会運動への関わり方にどのような影響をおよぼしているのだろうか。

ここでは、アイヌとしてのエスニック・アイデンティティと運動への関わり方をアイヌ協会への加入と関わりの現状からみていくこととする。アイヌ協会への加入はいわばアイヌの人々の組織化の形態であり、アイヌ政策への希望やコミットメントのための基盤であるとするならば、アイヌの人々がいかなるスタンスでアイヌ協会に関わっているのかは、運動への関わり方を推察するうえで重要であると考えられる。

アイヌ協会は「アイヌ民族の尊厳を確立するため、その社会的地位の向上と文化の保存・伝承及び発展を図ること」を目的とした社団法人であり、さまざまな事業を行っているが、上山（2012）はそれらの事業をおよそ次の3つに整理している。すなわち、①アイヌの人々の生活向上に関する事業、②アイヌの文化の保存・伝承・発展に関する事業、③アイヌの人々の社会的地位の向上に関する事業である。

本調査の対象者については、84.2%がアイヌ協会に加入している（表4－9）。アイヌ協会への加入の経緯については、「家族が加入していたので」、「親に勧められて」、「結婚を機に」という家族のつながりによる加入のほかに、「シャクシャイン祭りに参加して」加入したいという気持ちになったというものや、「仕事関係で勧められて」、「仕事関係でメリットがある」などの理由があげられていた。これらをふまえ、協会の加入の動機は、2つに大別することができる。

ひとつは、協会が主催するアイヌの伝統文化に関連する行事などに中心的あるいは裏方として関わることで、アイヌ文化に親しみながらアイヌ文化の保存・伝承・発展に寄与する機会を得ると

いう動機での加入であり、いまひとつは、教育費の給付貸付や住宅資金の貸付など、協会に加入することによって制度が利用しやすくなるというメリットを考慮しての加入である。ひとつめの理由については、前節のアイヌ文化の実践という観点から推し量ることができるが、ふたつめの理由については、とりわけ、こういった制度を利用する必要性が高いと考えられる壮年層において、アイヌ協会への加入率がもっとも多くなっていることから（88.5%）、加入の動機が制度利用のメリットにあると窺うことができる。加入の時期についても、自らが世帯をもったことをあげる者も多く、子育てや住宅の必要性が生じた時期に合わせて加入しているとみられる。

表4-9 アイヌ協会への加入 単位：人、%

年齢層	加入している		加入していない		不明	
青年層（9人）	6	66.7%	3	33.3%	0	0.0%
壮年層（26人）	23	88.5%	2	7.7%	1	3.8%
老年層（22人）	19	86.4%	2	9.1%	1	4.5%
合計（57人）	48	84.2%	7	12.3%	2	3.5%

- ・ そのアイヌに生まれたがゆえに、アイヌで生まれたおかげで、息子もその協会の学費援助してもらってっていう、これは素晴らしい制度だと思うし、感謝して高校卒業させたっていうこと、それはもう子どももわかっている。（壮年層・女性）
- ・ やっぱ、こうやって色々援助して頂いたり何なりという部分、反面自分らも何かしら出来る範囲でやらなきゃいけないのかなっていうふうに思います。ただ、もらって、はい終わりっていう訳にもいかないと思うんで。（壮年層・男性）
- ・ もちろん僕も奨学金制度だったり受けてたんですけど、結局は自分の息子にもそういう協力してもらえんで、親から協力してもらえんだったら入ったほうがいいんじゃないかいということで。（青年層・男性）
- ・ ゆくゆくはお世話になるだろうという頭もあるんで、うん、今のうちからでもね、ちゃんと入って貢献、その時ばっかりお世話になるんじゃなくて、今からちゃんと、うん、やってこうと思って。（青年層・女性）

現在、協会の活動にあまり参加できていない壮年層においては、教育費の給付貸付や住宅資金の貸付制度を利用することを想定して、「のちのち世話になる」、「世話になったあとは奉公しなければ」といった語りもみられる。アイヌ協会が主催するシャクシャイン祭りなどの行事に裏方として関わることは、アイヌの伝統文化を普及・啓発、継承の役割を担うという一方で、こういった制度を利用するにあたっては、日頃からアイヌ協会との関わりをもち続けながら、何らかの寄与をしておかなければならないという心構えがあるようである。だが、老年層からは、制度を利用し終わると、すぐにアイヌ協会を辞める者もいるという批判や、給付貸付の制度自体が不十分であるとの声も上がっている。

- ・ 奨学金があるから、そしたら大学にやるかっていう話じゃないわけよ。（中略）奨学金はもうほんとにある程度、学費でもさ、アパート代でもただぐれえにする。そうしないとね、アイ

ヌの子弟にね、高等教育なんか受けさせられねえ。スタートラインが違ったんだもの、基本的に。(壮年層・男性)

こうしたアイヌ協会を通してなされるアイヌの人々への支援策が不十分であるという声を、アイヌ協会が国や北海道に申し立て、あるいは問題提起するという役割を担うことについては、「(政策提言の面で) 協会に頼れない」(青年層・女性) という見方がある。他方、アイヌ協会に加入してから運動に熱心な人々に出会い、「アイヌの人ってなんかほんと(中略) 恐いっていうかなんていうんですか。熱いんですよね」(青年層・男性) という一歩引いた印象をもつ者もいる。ここからは、自らが運動の主体となり、アイヌ協会という組織を通じてアイヌ政策を前進させようとする意識が希薄であることがみてとれる。しかし、とりわけ若い世代が何らかのかたちでアイヌ協会にコミットすることは、エスニック・アイデンティティが個々人のみのものではなく、アイヌ民族が集団としてそのアイデンティティを次世代につないでいく可能性を探ることにつながるだろう。

以上のことから、アイヌの人々によるアイヌ協会への関わりには、アイヌ文化継承の主体としての関わりと、制度の利用者としての客体としての関わりの両面がある。とりわけ後者については、個人あるいは世帯がそのメリットを直接的に受けられることが、青年層や壮年層のアイヌの人々が協会に加入する際の動機になっており、まずは自分の生活を守ることが主眼におかれているといえる。全体としては、アイヌ協会が提供するアイヌ文化の体験が、民族の誇りを取り戻すあるいはアイヌ民族である自分を肯定的に捉える機会になっていると同時に、経済的なメリットが一般の人々をアイヌ協会につなぎとめているという側面を無視することはできない。したがって、アイヌ協会への加入と関わりは、アイヌ文化の保存・伝承・発展に携わるという動機と、教育費や住宅資金の制度利用にメリットを感じての動機が絡まり合いながら、人々のエスニック・アイデンティティに影響をおよぼしているといえるだろう。

おわりに

本章では、アイヌの人々のエスニック・アイデンティティについて、その形成と変容を、過去・現在・未来の軸に沿って検討してきた。ほぼすべての人が、アイヌであることについて、過去は「否定的」であった者であっても現在は「肯定的」あるいは「どちらでもない」という意識を有するようになっており、現在において「否定的」である者は1人のみであった。したがってアイヌの人々のエスニック・アイデンティティは概して肯定的になってきているといえる。また現在、アイヌであることについて「肯定的」である者は老年層に多く青年層で少なかった。一方で「どちらでもない」という意識を有する者は青年層が多く老年層で少なかった。このことは、老年層や壮年層が過去、アイヌであることについて否定的な意識をもたざるをえなかった経験から、現在、さまざまなアイヌ文化にふれ、民族としての誇りを取り戻すプロセスを経てきたことがあげられる。これに対し、青年層は否定的な意識をもつという経験をしていないと同時に、肯定的なエスニック・アイデンティティをもつにいたるアイヌ文化の経験も多くないという背景がある。したがって、現在の青年層が、今後さまざまなアイヌ文化等の経験を経ることで、アイデンティティが変化していく可能性もありうる。

家族のなかでは途絶えているアイヌの伝統文化を経験する機会を提供できるのは、アイヌ協会や

保存会であり、エスニック・アイデンティティの醸成という意味で、アイヌ協会が果たす役割は大きいといえる。しかしながら、人々のアイヌ協会への加入の動機は必ずしもアイヌ文化の保存や継承というわけではない。とりわけ青年層や壮年層にとっては、現在と将来を見据え、実際の生活に役立つ教育費の給付貸付や住宅資金の貸付といった制度の利用に備えて協会に加入するという意味合いも大きい。これらのことから、アイヌの人々のエスニック・アイデンティティの形成には、アイヌ文化の経験のみならず、現代を生きるアイヌの人々の生活にとって直接的に有益である給付貸付事業等の制度の存在が、今後も影響を与え続けるであろう。

参考文献

- Giddens, A., 2001, *Sociology* (4th ed.) (Cambridge: Polity Press). 松尾精文ほか訳, 2004, 『社会学』 而立書房.
- 小内透・長田直美, 2012, 「アイヌとしてのアイデンティティの形成と変容」 小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』 北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 169-81.
- Phinney, J. S., 1990, “Ethnic Identity in Adolescents and Adult: Review of Research”, *Psychological Bulletin*, 108(3), 499-514.
- 上山浩次郎, 2012, 「エスニックな社会運動への参加と意義ーアイヌ協会がもつ生活上の意味」 小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』 北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 183-93.

インターネット資料

社団法人北海道アイヌ協会のホームページ
<http://www.ainu-assn.or.jp/about01.html>

(新藤こずえ)